＜論文（英語学）＞

古英語訳福音書における拡充形に関する研究

堀　口　和　久

要旨

古英語訳福音書における拡充形の分布を調べると，全部で66の用例が存在し，ヨハネ伝とその他の福音書（共観福音書）の間に極めて頻度に差が存在することが分かり，複数の著者が存在する可能性がうかがわれる。

ヨハネ伝以外で拡充形が使われている箇所について，ラテン語の原典と比較して，翻訳技法に着目すると，ラテン語でもesse（英語のbe動詞に対応）＋現在分詞となっている例が極めて多く，ラテン語の異態動詞（形式所相動詞）の未完了過去形や完了形の翻訳に対応する拡充形が見られないという特徴がある。

共観福音書で拡充形が用いられている箇所について，他の古英語等の宗教散文における引用箇所などと比較すると，拡充形の用い方が類似している用例を初期中英語期まで見出すことができる。よって拡充形の用い方には，筆者間である程度，統一性があったものと思われる。

これにより，従来の研究では必ずしも明らかではなかった古英語訳福音書と他の後期古英語散文等の関係について，英語の一つの構文を通じて，わずかではあるものの解明がなされたことになる。

キーワード

古英語，ラテン語，進行形，翻訳

1　はじめに

古英語期の後期に書かれた代表的な散文として，新約聖書の四福音書のラテン語からの翻訳を挙げることができる。この古英語訳の著者は現在のところ明

らかとはなっていない。さらに四福音書が単一の執筆者によって書かれたものであるか否かという問題も現在のところ不明であり，多くの議論がなされている[1]。

この論文では，最近のLiuzza（1994, 2000）の校訂本を用いて，この福音書の翻訳の中で用いられている拡充形（beon/wesan＋現在分詞）の用例について，翻訳技法の観点から，ラテン語原典との比較を行ないつつ，分析を試みる。次に，他の古英語散文において，福音書の引用がしばしばなされているが，こうした他の古英語散文とも比較を行い，拡充形の意味・用法・機能を検証したい。

この古英語訳福音書については，８つの写本が現存するが，拡充形の用例に関する限り，写本間の異同は，わずかな例を除いて問題とはならない[2]。古英語訳福音書に関しては，Skeatの校訂本が存在するが，写本間の異同が重要な問題とならないため，Luizza(1994)を基本的に用いて分析を行なった。

2　拡充形の頻度

表１に掲げたように，古英語訳の四福音書の総計で66例の拡充形の用例が存在する。マタイ伝には13例，マルコ伝には19例，ルカ伝には34例の拡充形の用例が存在する。この66例の用例のうち，51例は主節で用いられており，従属節で用いられているのは15例に過ぎない。なおこれらの中には，現在分詞が形容詞的に用いられている可能性が高い等の理由で，拡充形の用例の中に含めるのが適切でない可能性のあるものも含まれる。拡充形の頻度としては古英語訳Orosiusや古英語訳Bede，古英語訳*Gregory's Dialogue*と比較すると頻度は高

1 例えば，Raith(1951), 佐藤(1991), Liuzza(2000)，小塚(2002)などがある。

2 Luke 1:20の例は，H写本では，nu abydst swigendeとなっており，拡充形ではない。なお，この写本記号はLuizza(1994)による。この用例は，Raith(1951)では形容詞と解釈すべきとされている。さらに，Luke 9:31の例は，A写本ではgefylleneと不定詞に翻訳している。古英語を文法的に読む限り，拡充形の読みが正当であるが，この箇所は，ラテン語の未来分詞の翻訳の箇所であり，ラテン語の原意に近いのは不定詞である。

いとはいえない。注目すべきことに，ヨハネ伝には全く用例が存在しない。この問題はおそらく，筆者（authorship）の問題と関連し，Liuzza（2000）で論じられているように複数作者説を支持する論拠となるであろう。

また，古英語において拡充形は，直訳に近い作品の場合に頻度が極端に高くなる傾向があると一般には言われる。一般に直訳に近いか否かを測る指標としては，ラテン語の絶対奪格構文（ablative absolute）の模倣といわれる絶対与格構文（dative absolute）の頻度が用いられることが多い。すると，古英語訳ヨハネ伝では，1例しか絶対与格構文が用いられておらず，より意訳的でラテン語原典から離れていると考えられる。こうした翻訳の特徴と，ヨハネ伝における拡充形の欠如は，部分的にはあれ，関連している可能性がある。

表1

Matthew	bodiende(4:23)
	onbugende(5:25)
	hogiende(6:34)
	læswiende(8:30)[3]
	licgende(9:36)
	standende(16:28)
	etende(24:38)
	drincynde(24:38)
	wifigende(24:38)
	syllende(24:38)
	grindende(24:41)
	healdende(27:54)
	sittende(27:61)

3 この用例は，Luizza(2000)によって，Errors and Bad Translationsとされているものであり，拡充形の用例として適切でない可能性がある。Mark 5:11の用例も同様である(p.83)。

Mark	fulligende(1:4) bodi(g)ende(1:4)(1:39) onfonde(1:17) lærende(1:22)(14:49) adrifende(1:39) sittende(2:6) þencende(2:6) fæstende(2:18) slapende(4:38) hrymende(5:5) ceorfende(5:5) læsgende(5:11) gangende(7:15) wuniende(8:39) specende(13:11) feallende(13:25) behealdende(15:40)
Luke	unberende(1:7) gebiddende(1:10)(9:18)(11:1) suwiende(1:20) geanbidiende(1:21) bicniende(1:22) waciende(2:8)(6:12) healdende(2:8) wundriende(2:33) behealdende(4:20) hæbbende(4:33)(19:17)

	bodigende(4:44) gefonde(5:10) sittende(5:17) donde(6:43) dringcende(7:34) standende(9:27) gefyllende(9:31) adrifende(11:14) embeþencynde(12:11) byrnende(12:35) (24:32)[4] cyþende(13:1) lærende(13:10)(19:47)(21:37) grindende(17:35) yrnende(22:44) sittende(22:69) hergende(24:53) bletsigende(24:53)

3　拡充形として用いられている動詞

拡充形として用いられる頻度が高い動詞としては，bodianやgebiddan，læranを挙げることができる。こうした傾向は，他の古英語の作品と共通する。ただし，厳密にはgebiddanのみであり，biddanの用例は存在せず，拡充形で用いられるgebiddanの主語はキリストであって，一般の人ではないというのは，極めて特異である。なお，多くの古英語散文では，sprecan, cweðan 等の発話動詞の拡充形がしばしば用いられるが，この作品の場合，sprecan（specan）

4 この箇所も不適切な翻訳であるとLuizza(2000)が指摘している例に含まれる(p.96)。

の１例を除いて[5]，一切用いられていない。一般に，ラテン語の翻訳作品の場合，ラテン語のloquorの未完了過去形，完了形の場合に，古英語訳として拡充形がしばしば用いられるが，こうした用例がないためである。古英語の代表的な散文作家としてÆlfricを挙げることができるが，Ælfric特有のwunianの拡充形の多用という現象は見られず，wunianが拡充形として用いられる例は１例しか存在しない。

さらに古英語後期の代表的な散文作家として，Wulfstanの名前を挙げることができるが，Wulfstanに見られるþeowian(あるいはþenian)の拡充形の用例も全く見出すことができない。分布状況は，表２に示す。

4　ラテン語との比較

古英語訳福音書について，古英語の拡充形の部分についてラテン語原典との比較を試みると，その多くはラテン語でも，拡充形であり逐語訳的に翻訳することにより古英語でも拡充形となっているケースが極めて多いことが分かる(53例)[6]。例えば，(1)は古典ラテン語では珍しいラテン語の拡充形を，古英語でも拡充形として翻訳している例である。

(1)

L　et **erat praedicans** in synagogis Galilaeae... (Luke 4:44)

OE　and he **wæs bodigende** on galilea gesamnungum;

---

5 このspecendeの用例について，Mossé(1938)は，現実性を表すと述べているがその意味内容・定義は明確ではない(p.79)。なお，Mosséの分類体系に従った場合，古英語訳福音書の用例のかなりの部分は，現実性と起動相という範疇に含まれることになるようである。起動相との関連で，Mosséが挙げているのはMatthew 24:41, 及びMark 13:25であるがいずれも他の散文との比較等が一切なされておらず，ただ例が列挙されているのみで説得力に欠ける。

6 なお，Raith(1951)が指摘していることであるが，逆はあてはまらない。つまりラテン語で拡充形が用いられているからといって，その全てが古英語で拡充形となっているというわけではないのである(p.80～82)。

表２　　拡充形で用いられている動詞と頻度

		Matthew	Mark	Luke
adrifende	2		1	1
behealdende	2		1	1
bicniende	1			1
bletsigende	1			1
bodiende	4	1	2	1
byrnende	2			2
ceorfende	1		1	
cyþende	1			1
donde	1			1
drincynde	2	1		1
embeþencynde	1			1
etende	1	1		
fæstende	1		1	
feallende	1		1	
fulligende	1		1	
gangende	1		1	
geanbidiende	1			1
gebiddende	3			3
gefonde	1			1
gefyllende	1			1
grindende	2	1		1
hæbbende	2			2
healdende	2	1		1
hergende	1			1
hogiende	1	1		
hrymende	1		1	
lærende	5		2	3
læswiende	2	1	1	
licgende	1	1		
onbugende	1	1		
onfonde	1		1	
sittende	4	1	1	2
slapende	1		1	
specende	1		1	
standende	2	1		1
suwiende	1			1
syllende	1	1		
þencende	1		1	
unberende				1
waciende	2			2
wifigende	1	1		
wundriende	1			1
wuniende	1		1	
yrnende	1			1
計	６６	１３	１９	３４

こうした翻訳技法は，代表的な著作では採用されておらず，極めて特異的と考えられる[7]。

多くの古英語の翻訳作品では，ラテン語の同格的現在分詞（主格で用いられているもの）が，しばしば拡充形で翻訳される。しかし，この福音書の古英語訳の場合には，(2)など6例のみしか存在しない。

(2)

L　Et circumibat Iesus totam Galilaeam docens in synagogis eorum et **praedicans** evangelium regni...(Matthew 4:23)

OE　And þa beferde se hælend ealle galileam. lærende on hyra gesomnungum: and **he wæs bodiende** godspel...

なお，ラテン語からの翻訳による古英語の作品の多くでは，deponent verbs（形式所相動詞，異態動詞）の完了（過去）形や，一般動詞および形式所相動詞の未完了過去形の場合にしばしば古英語で拡充形として翻訳される傾向があるが，こうした例を全く見出すことができない。またラテン語原典の現在分詞を用いた絶対奪格構文について，古英語で拡充形を用いて翻訳するケースもしばしば見出されるが，こうした例も全く存在しない。

よって，翻訳技法という観点から見た場合，この古英語訳福音書は他の古英語の翻訳散文と比較して，独特の位置を占めると考えられる。

5　拡充形の意味・機能

1）アスペクト的用法

古英語において，拡充形は継続を表す場面で用いられるケースがあり，そう

7 こうした現象はいくつかのマイナーな作品群には見られる現象なのかもしれない。今後の研究課題としたい。

したケースではしばしば，時間的継続を表す副詞句と共起したり，oþ ～と共起することになる。例えば，oþ ～と共起する例としては以下の用例がある[8]。

(3)

OE　And nu þu **byst suwiende.** and þu sprecan ne miht. oð þone dæg þe ðas ðing gewurðaþ: (Luke 1 :20)

以下のルカ伝からの用例(4)(5)の場合，内容・意味的に時間的継続の意味を読み取ることができる。(4)は，ザカリアがくじをひいたところ，主の聖所で香をたくことになり，その間，多くの民衆が外で祈っているという場面であり，(5)は民衆はその間，外でザカリアを（祈って）待っていたという場面である。

(4)

L　et omnis multitudo erat populi orans foris hora incensi...
(Luke 1:10)

OE　eall werod þæs folces **wæs** ute **gebiddende** on þære offrunga timan.

(5)

L　et erat plebs expectans Zacchariam et mirabantur...(Luke 1 :21)

OE　And þæt folc **wæs** Zachariam **geanbidiende** and wundrodon þæt he on þæm temple lat wæs;

以下の(6)の用例も時間を表す副詞句等はないが，内容的に継続の意味を読み

8 oþ～が使われている用例ではあるが，Raith(1951)は，Matthew 24:38の4例を拡充形ではないとしている(p.81)。これは現在分詞が4回も連続的に用いられていることと，同格的な現在分詞構文と解釈可能なためであると思われる。

取ることが可能である[9]。þurhwunianという動詞には継続という意味的特性があり，口がきけない間，「合図をし続けた」と解釈可能だからである。

(6)

L　et ipse erat innuens illis et permansit mutus... (Luke 1:22)

OE　and he **wæs bicniende** him and dum þurhwunede;

以下の(7)の用例は，ラテン語vigilare（英vigil）という語から[10]，また類似の(8)に関しては，ラテン語のpernoctareから継続のニュアンスを読み取ることが可能である。なおこの箇所については初期中英語でも拡充形で翻訳されている。

(7)

L　et pastores erant in regione eadem vigilantes et custodientes vigilias noctis supra gregem suum... (Luke 2:8)

OE　and hyrdas **wæron** on þam ylcan rice **waciende**: and nihtwæccan healdende ofer heora heorda...

(8)

L　et erat pernoctans in oratione Dei... (Luke 6:12)

OE　**Soþlice** on þam dagum he ferde on anne munt hine gebiddan. and **wæs** þar **waciende** on godes gebede;

9　Luke 22:69のsittendeも継続の意味に解釈可能である。

10 初期中英語のHomilyにこの箇所を拡充形で翻訳している例が存在する。

were herdes wakiende bi side þe buregh and wittende here oref.

(ed. Morris　p.31/24)

ところでこの初期中英語の用例に関し，Mossé(1938)は同時性を示すと述べているが，継続と解釈して差し支えないと考えられる。

次の(9)の用例であるが，「突風の間も，眠り続けられた」と解釈できる[11]。

(9)

L　et erat ipse in puppi supra cervical dormiens... (Mark 4:38)

OE　and he **wæs** on scipe ofer bolster **slapende**.

また，「～している間（古英語ではþa～，ラテン語ではcum～）」という構文の中で拡充形が用いられているケースも5例存在する。こうした現象は，他の古英語散文の用例と類似する。例えば，(10)が1つの例である。ただしこの用例の場合，soþliceという強調的語句と関連している可能性もある[12]。

(10)

L　Et factum est cum esset in loco quodam orans... (Luke 11:1)

OE　**Soþlice** wæs geworden **þa** he wæs on sumere stowe hine gebiddende.

さらに以下の用例(11)については，拡充形であるか否かについて異論があるが[13]，on þam dagumやoð þone dægという句の存在は継続の意味を支持することになる。

---

11 なおこの箇所については，マタイ伝では単純形が用いられている。Ælfricは2つのhomilyでこの箇所を問題としておりラテン語のマタイ伝を典拠としているのかもしれないが，別の表現を用いており，拡充形は用いていない。Godden(1979)p.218及びPope(1967)p.575の注解を参考にする限り，基本的には，Ælfricは，マタイ伝を用いて，部分的にマルコ伝から語句を追加しているようである。
ところで，Raith(1951)はこのマルコ伝の4:38の用例以外にも，マルコ伝の1:4,5:5の用例は，拡充形としては疑わしい用例であるとしている。

12 soþliceという語が共起している例としては，Matthew 16:28, Mark 1:22, Mark 8:39, Luke 6:12, Luke 9:27, Luke 11:1, Luke 21:37がある。

13 Raith(1951) p.81参照。

(11)

L　sicut enim erant in diebus ante diluvium comedentes et bibentes nubentes et nuptum tradentes usque ad eum diem...(Matthew 24:38)

OE　swa hi wærun on þam dagum ær þam flode. **etende** and **drincynde** and **wifigende** and gyfta **syllende. oð** þone dæg...

以下の(12)の用例は，langeという時間的継続を表す副詞と共起しているので，継続的意味を有するとも考えられるが，汗を血の流れに喩えている場面であり，vividness等の強調的意味を有するとも考えられる[14]。

(12)

OE　þa ætywde him godes engel. of heofone and hyne gestrangode and he was on gewinne and hine **lange** gebæd and his swat wæs swylce blodes dropan on eorðan yrnende.(Luke 22:43~44)

さらに，古英語期の拡充形はsymleという継続を意味する副詞と共起する例がしばしば見られる[15]。以下の(13)のようにマルコ伝からの用例を挙げることができる。

(13)

OE　and symle dæges and nihtes he wæs on byrgenum and on muntum. hrymende and hine sylfne mid stanum ceorfende; (Mark 5/5)[16]

---

14 修辞的表現と拡充形が共起する例がしばしば見られるが，古英語訳福音書では他にLuke 4:20がこれに該当すると考えられる。ここでは全ての人ではなく，「全ての目が見ていた」と語られている。

15 例えば，他にLuke 24:53を挙げることができる。

16 Ælfricではこの場面で，同格分詞を用いて翻訳しているが，symleを用いていない。
He wunode on dunum dæges and nihtes. and on byrgenum. hrymende. and beatende hine sylfne mid stanum.(ed. Godden p.218/152～154)

2）強調的用法

まず第一に，具体的事実の列挙ではなく，総称的・一般的な内容を表す場合に拡充形が用いられる。以下の(14)(15)などがこうした例に該当する。具体的な福音の内容や癒しの内容は以後さまざまな形で語られるからである。

(14)

L　Et circumibat Iesus totam Galilaeam docens in synagogis eorum et praedicans evangelium regni...(Matthew 4:23)

OE　And þa beferde se hælend ealle galileam. lærende on hyra gesomnungum: and he **wæs bodiende** godspel þæs rices. and hælende ælce adle and ælce untrumnesse.

(15)

L　et erat praedicans in synagogis eorum et omni Galilaea et daemonia eiciens...(Mark 1:39)

OE　and he **wæs bodigende** on heora gesamnungum and ealre galilea. and deofolseocnessa ut adrifende;

類似の例として，洗礼者ヨハネが登場するMark 1:4などを挙げることができる。

拡充形の構文が，命令形で用いられる例も古英語全体のコーパスの中では，しばしば存在する[17]。以下の(16)(17)(18)はそうした例の一つとなるが，これも強調的機能と関連すると考えられる[18]。

---

17 Mitchell(1985) p.273を参照。

18 この点は，Mossé(1938)も同様の指摘を既に行なっている(p.100～101)。

(16)

OE　**Beo** þu **onbugende** þinum wiðerwinnan... (Matthew 5:25)

(17)

OE　ne **beo** ge **embeþencynde**: hu oððe hwæt ge specon. oððe andswarian. (Luke 12:11)

(18)

OE　Ne beo ge na **hogiende** ymb þa morgenlican neode. (Matthew 6:34)[19]

次の(19)の用例であるが，この用例では拡充形が，強調的意味を有する呼びかけの語とともに用いられている。またær以下の節との関連から，継続的意味が含まれると考えることもできる。

(19)

OE　Soþlice ic secge eow. sume synt her standende. þe deaþ ne onbyrigeaðær hig geseon mannes sunu.(Matthew 16:28)[20]

この(19)と類似した例は，Mark 8:39, Luke 9:27に見出すことができる。

さらに終末の状況を示す場面で頻繁に拡充形が用いられる例が，他の宗教散

---

19 この箇所は，他の散文でも引用されているが引用では必ずしも拡充形は用いられていない。Ælfricの聖マーティン伝では，swa swa þæt godspel sægð. Ne þenc þu be mergene.　(p.222/57)となっている。さらに*Vercelli Homily* 18も聖マーティンを扱ったものであり，表現が異なるが以下のように述べられている。

Gemunde he þæt Godes bebod þæt he sylfa on his godspelle bebead: he swa cwæð þæt se Godes man ne sceolde be ðam mergendæge þencan... (p.293/39～41)

20 なおこの箇所は，*Irvine Homily* 6で以下のように引用がなされているが，soðliceという語が用いられておらず，拡充形は用いられていない。

And cwæð ða ȝyt, þæt summe þa ðe þær weron ne sceolden deaþes onfon ... (p.166/7～8)

文などで多く見られ，Mark 13:25の用例はこの１つの例に含められよう。

しかしながら，表１で挙げた用例の中には，拡充形・現在分詞ではなく，形容詞として用いられている可能性のある箇所も存在する[21]。また，ラテン語を直訳したことが原因で，なぜ拡充形が用いられているか疑問が残る箇所も存在する[22]。

以上のように問題は残るものの，古英語訳福音書の拡充形の用例は，かなりの部分が，いくつかの基準に基づき説明可能である。ただし，ヨハネ伝において拡充形の用例が全く見出されなかったように，拡充形の使用に関しては，作者によって文体的な違いが存在したことは疑いないと考えられる[23]。

ただし，以下で他の散文との比較を行なうが，統一性・共通項も発見できるのである。

6　他の散文との比較

1）Ælfricの散文との比較

ÆlfricのHomilyでは冒頭の部分などで，福音書の翻訳が引用されるケースがしばしば存在する。そこで，既に検討した福音書の古英語訳（WS）で拡充形が用いられている部分について，Ælfricの散文ではどのような翻訳がなされているかについて検討する。例はわずかだが，興味深い特徴を見出すことができる。

---

21 例えば，Luke 1:7のunberendeは形容詞である可能性が高い。Luke 12:35,Luke 24:32のbyrnendeも同様である。これらはRaith(1951)も指摘している (p.82～83)。

22 例えば，Luke 4:33のhæbbendeは，同格で用いられている現在分詞である可能性が高い。またLuke 6:43のdondeも句読点等から考えて同様である。
Raithはさらに，Luke 2:8の２例，Luke 9:18, Luke 11:1, Luke 24:53の２例も疑わしいとしている(p.82)。

23 例えば，終末をテーマとした散文の間でも，散文によって拡充形の頻度に大きな較差がある場合があり，こうした文体的違いが存在することは否定できない。

以下の用例(20)は，(7)で既に検討した用例であるが，Ælfricにおいても拡充形が用いられている。

(20)

WS　and hyrdas **wæron** on þam ylcan rice **waciende**: and nihtwæccan healdende ofer heora heorda... (Luke 2:8)[24]

Ælfric　þa **wæron** hyrdas on ðam earde **waciende** ofer heora eowde. 7 efne þa godes engel stod onemn hi... (ed. Clemoes p.190/21~22)

以下の用例(21)は，既に(14)でも取り上げた例であるが，Ælfricでは拡充形が用いられていない用例である。しかしながら，Ælfricでは拡充形を用いる代わりに，古英語訳福音書でも，原典のラテン語でも用いていないsymleを用いて意味を補充しているのである。

(21)

WS　And þa beferde se hælend ealle galileam. lærende on hyra gesomnungum: and he wæs bodiende godspel þæs rices. and hælende ælce adle... (Matthew 4:23)

Ælfric　þa ferde he geond eall þære foresædan scire, to eallum samnungum, symle lærende þæt folc, 7 bodigende godspell 7 Godes rice mannum...(ed.Pope p.567/5~7)

(22)の用例では，古英語訳のルカ伝では，grindanが拡充形となっているにも

24 この用例について，Raith(1951)は疑わしい用例としているが(p.82)，他の散文でも幅広く用いられている状況からかんがみて，この意見は疑問である。

25 古英語訳Matthew 24:41でも，同じ趣旨の文脈でgrindanが拡充形で用いられている。

かかわらず[25]，Ælfricではerianが拡充形となっており，拡充形の位置が異なっている。

(22)

WS　**Soðlice** ic eow secge on þære nihte beoð twegen on bedde an byð genumen and oðer bið forlæten; Twa **beoð** ætgædere **grindende**. an bið genumen and oðer læfed; Twegen beoð æt æcere. an bið genumen and oðer bið læfed;（Luke 17/34~35）

Alfric　On þære nihte beoð twegen on anum bedde; an þæra bið genumen and oðer bið forlæten. And twa grindað þonne on anre cwyrne ætgædere; seo an bið genumen and seo oðer bið forlæten. Twegen **beoð** on æcere **erigende** ætgædere; se an bið genumen, and se oðer bið forlæten.(ed. Pope p.592/31~36)

なお原典のラテン語では，*(duae erunt) molentes*という現在分詞がgrindendeに対応するものとして存在するのに対して．Twegen beoð on æcere erigende ætgædereに関しては，ラテン語は*duo in agro*とあるのみで，古英語の現在分詞erigendeに対応するラテン語すら存在しないのである。

ではなぜこのような違いが生じているのであろうか。これは翻訳文体の違いと，Ælfricの意図に原因を求めることが可能と思われる。古英語訳ルカ伝の翻訳には誤りと思われるような箇所もあり．やや逐語的といわざるをえない。よって，ラテン語のesse（現代英語のbeに対応）＋現在分詞をそのまま古英語で拡充形で表現した。一方，Ælfricはこのルカ伝を引用して釈義を加え，「一つの寝床にいる状態」「一緒にうすを引いている状態」「畑で耕している状態」とは何を意味するかを説明したのちで第三の段階が最高の完成段階であると述べており，よって「耕す」という動詞が拡充形となっていると考えられる。

以下の(23)の拡充形の用例は，古英語訳福音書のみでは，継続の意味に解釈

することが可能ではあるが，必ずしも明確ではない。ところがこれを基にしたÆlfricからの引用(24)は明らかに継続と解釈でき，ここでÆlfricは，用いている動詞は異なるものの，拡充形を用いている。さらに(25)も同じルカ伝19章47節を基にしたものであり，Ælfricからの引用であるが，ここでもÆlfricは拡充形を用いている。このように，古英語の拡充形の用法は，筆者によって完全に異なるわけではなく，統一性や共通項が見られる用例が多く存在することになる。

(23)　Hit is awriten þæt min hus ys gebedhus. ge hit worhton to sceaðena scræfe: and he **wæs** dæghwamlice on þam temple **lærende**;
(Luke 19:47)

(24)　Se hælend **wæs wuniende** binnan ðam temple. of þisum dæge oð nu on þunresdæig.　(ed. Clemoes　p.295/21)

(25)　7 **wæs tæcende** dæighwomlice binnon þam temple;
(ed. Clemoes　p.410/16)[26]

2）*Vercelli Homily* 5

Vercelli Homily 5ではルカ伝の第2章の引用がなされており，拡充形の用法について，古英語訳福音書と*Vercelli Homily*の間で興味深い違いが見られる。

(26)

Ver5　On þam ilcan lande **on þa niht** wæron hyrdas wæccende 7 hioldon þa wæccan þære nihte ofer hiora ewede. (p.112/25~27)

26 この用例は，本文の釈義では，wæs lærendeと別の動詞になっている(ed. Clemoes p.413/14～15)が繰り返されて用いられている。そして，この釈義の部分はMitchell(1985)によって引用されており，拡充形は，習慣的行動を示すと述べられている(p.274)。

WS　and hyrdas wæron on þam ylcan rice waciende: and nihtwæccan healdende ofer heora heorda...(Luke 2:8)

(27)

Ver5　þa wæron þa hyrdas **swiðe** forhtiende **mid mycle egsan** 7 hie him **swiðe** ondredon. (p.112/28~29)

WS　and hi him mycelum ege adredon.(Luke 2:9)

(26)では，*Vercelli Homily* 5では，時を表す副詞句が用いられている場合のみ(on þa niht)，拡充形が用いられている[27]。さらに，天使が羊飼いに現れ，羊飼いは非常に恐れたという場面である(27)では*Vercelli Homily* 5では原文のラテン語を敷衍しており，swiðeという語とmid mycle egsanという副詞（句）を二重（三重）に用いて驚きを強調して拡充形を用いている。よって，こうした側面からも，古英語期の拡充形が継続的な意味合いを表したことと，また強調的機能と関連があることが分かる。

3）Homily S 18との比較

Homily S 18は，Palm Sundayを扱ったものであり，Schaeferによって校訂されたテキストが存在するのでこれを用いて，古英語訳福音書と比較を行なった。Homily S 18が元にしているのはマタイ伝であるが，古英語訳福音書では拡充形となっている箇所がHomily S 18では，いずれも単純形で翻訳されている。興味深いことに，古英語訳福音書では，拡充形と共起する形で強調的意味を表す副詞が用いられているのに対して，Homily S 18 (HS18)では，強調的副詞が存在しないのである[28]。

---

27 なお，この箇所に関しては，*Vercelli Homily* 5で引用の形で再びp.119/151 ～p.119/152で拡充形が用いられている。

28 この強調的副詞に対応する可能性のあるラテン語は福音書の原典(Vulgate)で用いられている*autem*という語である。しかし，この語は，古英語訳福音書でwitodliceあるいはsoðliceと訳されることもあるが，常にこのように訳されるとは限らない。

(28)

WS　**Witodlice** þæs hundredes ealdor and ða þe mid him wæron healdende þone hælynd. þa hig gesawon þa eorðbifunge...
(Matthew 27:54)

HS18　7 þa se hundredes ealdorman 7 ealle þa ðe mid him wæron, þætte hi beheoldon þone Hælend, þa hi gesawon ða eorðbifunge...
(p.31/189~p.32/191)

(29)

WS　Dær wæs **soðlice** seo magdalenisce maria and seo oðer maria sittende æt þære byrgene; (Matthew 27:61)

HS18　7 ðær wæs Maria Magdalene 7 seo oðer Maria, 7 sæton ofer ða byrgenne.　(p.33/204~205)

4）*Rule of Chrodegang*との比較

古英語訳*Rule of Chrodegang*は，厳密には宗教散文とはジャンルを異にするが，福音書の引用が含まれている箇所がある。古英語訳福音書で拡充形が用いられている部分について，古英語訳*Rule of Chrodegang*と古英語訳福音書を比較すると(30)のとおりとなる。使われている動詞は異なるが，拡充形の使用という点では，一致が見られるのである。古英語訳*Rule of Chrodegang*では拡充形の使用頻度は低いので，この例は重要な例と考えられる。なお，この古英語訳*Rule of Chrodegang*の拡充形の元の原典のラテン語は，erat... pernoctansである。ラテン語の接頭辞(per-)，そして古英語のþurh-からもこの*Rule*で拡充形は継続の意味で用いられていると考えられる。

(30)

Rule　**Soðlice** þæt godspel sægð þæt se Hælend wære　ealle niht **þurhwuniende** on þam godcun(d)lican gebede.(p.25/26~27)

WS　**Soþlice** on þam dagum he ferde on anne munt hine gebiddan. and wæs þar **waciende** on godes gebede;(Luke 6:12)[29]

厳密には使われている動詞は異なるし，*Rule of Chrodegang*では従属節で拡充形が用いられているわけであるが，強調語soðliceの使用など極めて両者は類似している。

7　結論

古英語訳福音書における拡充形の分布を調べると，ヨハネ伝とその他の福音書（共観福音書）の間に極めて頻度に差が存在することが分かり，複数の著者が存在する可能性がうかがわれる。

ヨハネ伝以外で拡充形が使われている箇所について，ラテン語の原典と比較して，翻訳技法に着目すると，ラテン語でもesse（英語のbe動詞に対応）＋現在分詞となっている例が極めて多い。ラテン語の異態動詞の未完了過去形や完了形の翻訳に対応する拡充形が見られないという特徴がある。こうした技法は古英語訳Bedeや，Alfred, Orosiusの古英語訳とも異なる。

拡充形の意味・機能は継続的意味と，強調的機能から基本的に説明可能であり，起動相の意味合いは含まれないと考えられる。

共観福音書で拡充形が用いられている箇所について，他の古英語等の宗教散文における引用箇所などと比較すると，拡充形の用い方が類似している用例を

---

29 なお，この箇所は*Vercelli Homily* 3でも以下のように引用がなされているが，拡充形が用いられている。

swa swa þæt godspell cyð þætte se hælend wære nihterne an gebedum **waciende**. (p.78/82～83)

さらに，ほぼ同じ例であるが，*Homily Belfour* 5でも引用がなされており，拡充形が用いられている。swa swa þæt godspell cyð þæt ðe Hælend wære nihterne on bedum **wacende**.　(p.44/22～23)

初期中英語期にまで見出すことができる。よって拡充形の用い方に，筆者相互間である程度の，統一性(uniformity)があったものと思われる。

なお，今後の課題として，初期古英語の福音書の行間注解，つまりリンディスファーン福音書，及びラッシュワース福音書の検討と相互の比較，および初期中英語以降の散文・韻文等との相互比較の研究をさらに進める必要があると考えている。

8　参考文献

Belfour, A.O. (ed.1909) *Twelfth-Century Homilies in MS. Bodley 343* EETS.O.S.137

Clemoes,P. (ed.1997) *Ælfric's Catholic Homilies The First Series* EETS. S.S.17

Godden,M.(ed. 1979) *Ælfric's Catholic Homilies The Second Series* EETS. S.S.5

Irvine, S. (ed. 1993) *Old English Homilies from MS Bodley 343* EETS. O.S. 302

小塚良孝(2002)「West Saxon Gospelsにおけるラテン語翻訳法」『言語文化学』Vol. 11

Liuzza,R.M. (ed. 1994) *The Old English Version of the Gospels* Vol.1 EETS O.S. 304

Liuzza,R.M. (ed. 2000) *The Old English Version of the Gospels* Vol.2 EETS O.S. 314

Mitchell, B.(1985) *Old English Syntax* Oxford

Morris, R. (ed. 1873) *Old English Homilies of the Twelfth Century, Series* EETS. O.S. 53

Mossé,F. (1938) *Histoire de la forme périphrastique être+participe présent en germanique* Klincksieck

Napier,A.S.(ed. 1916) *The Old English Version with the Latin Original of the Enlarged Rule of Chrodegang, an Old English Version with the Latin Original of the Capitula of Theodulf, an Interlinear Old English Rendering of the Epitome of*

Benedict of Aniane EETS. O.S. 150

Pope, J.C. (ed.1967~1968) *Homilies of Ælfric A Supplementary Collection* EETS. 259,260

Raith, J. (1951) *Untersuchungen zum Englischen Aspekt* I.Teil Max Hueber

佐藤明子(1991) 「The West-Saxon Gospels再考」『青山学院大学文学部紀要』３３号, p.151~167

Schaefer, K.(ed. 1972) *An Edition of Five Old English Homilies for Palm Sunday, Holy Saturday, and Easter Sunday* Diss. Columbia University

Scragg, D.G. (ed. 1992) *The Vercelli Homilies* EETS. O.S. 300

Skeat,W.W. (ed. 1881~1900) *Ælfric's Lives of Saints* EETS. O.S. 76,82,94,114

Skeat,W.W. (ed. 1871~1887) *The Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions, Synoptically Arranged, with Collations Exhibiting All the Readings of All the MSS.* 4vols. Cambridge University Press

Weber, R. (ed. 1994) *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem(Vierte, verbesserte Auflage)* Deutsche Bibelgesellschaft

（ほりぐち　かずひさ　本学専任講師）